

関西国際センター日本語教育シンポジウム

分科会「地域にひらく」の実施と学び

—地域の協力者との連携のために—

川嶋恵子・石井容子

1. はじめに

国際交流基金関西国際センター（以下関西センター）は、開設以来、「センター内での学習と日本語の運用の場とのつながりを常に重視し、専門領域の関係者や地域コミュニティと連携を取り」（上田 2008）、日本語教育の実践を積み重ねてきた。2008年3月に関西センターにおいて開催された日本語教育シンポジウム「ひらく・つなぐ・つくる 日本語教育の現場」では、3つの分科会が行われたが、分科会1では、地域コミュニティとの連携を取り上げ、「地域にひらく」をテーマとした。本稿は、その企画、実施、そしてそこからの学びについて報告するものである。

2. 分科会の企画

分科会「地域にひらく」を企画するに当たり、まず、これまで行ってきた交流プログラムについて、関西センターと地域の交流相手との関係を振り返ってみることにした。関西センターでは、日本語のコミュニケーション能力の向上や、日本文化・社会理解などを目的とし、様々な交流相手との多岐に渡る交流プログラム^①を研修に組み込んでいる（逢坂 2003）。その交流プログラムにおいて、地域の交流協力者^②（以下地域協力者）は、ホームステイ受け入れ、インタビュー相手、発表会のオーディエンス、会話パートナーなどとして、研修を支える交流相手としてなくてはならないものである。

関西センターではこれまで、多くの地域協力者と関わりながら研修を実施してきたが、今回、地域協力者との関係を振り返ることで見えてきたことがいくつかある。それは、①それぞれの交流プログラムが、実施時だけで完結してしまい、関西センターと地域協力者、あるいは地域協力者同士がプログラム実施時以外に顔を合わせ話すような機会はあまりなかったこと、そしてもう1点は、②これまで試行錯誤を繰り返しながら、様々な交流プログラムを滞りなく効果的に実施できるようになってきたが、同時に、関西センターと地域協力者の双方に慣れが生じているのではないかと、ということである。つまり、10年間のノウハウの蓄積の一方で、当然の

ものとして交流が繰り返されているという現実気づいた。

これらの点を、関西センターの問題点としてより具体的にまとめると以下ようになる。

① 交流参加者同士の経験の共有ができていないこと

先に述べた通り、異なる交流団体に所属する地域協力者同士が、交流について話し合うような機会はこれまでなかった。関西センターと個々の地域協力者あるいは交流団体との線の関係だけはあったが、ネット（網の目）の関係は生まれていなかった。個々が持つ多くの経験を個人のものとして終わらせないために、関西センターは、交流プログラム後のケアとして、地域協力者同士が意見を交換し、今後の活動に生かす助けとなる場を提供するべきではないか。

②-1 地域協力者に提供する情報の不足

交流プログラムが当然のものとして繰り返されており、関西センターは、プログラムを実施するにあたって、研修におけるその交流プログラムの位置づけを地域協力者に対して明示してこなかった。結果、地域協力者は、交流プログラムのタイプ（インタビューか、発表会か等）のみを知って参加しているということも起こっていた。地域協力者に、これからも同様に協力を依頼していく上で、双方の十分な理解は必要なものであり、関西センターは、地域協力者に研修の全体像や、研修における交流プログラムの意図を伝えるべきではないか。

②-2 交流後の相互のフィードバックの不足

これまでも交流プログラム後に協力者に感想を聞く簡単なアンケートは行ってきたものの、形式的になりがちで、地域協力者の生の声を十分に聞いてきたとは言いがたい。また、逆に、関西センター側から何らかの交流の結果や意見をフィードバックするような機会も十分には取ってこなかった。関西センターは、地域協力者の持っている経験や意見を実際に聞く機会を持つべきではないか。

以上を踏まえ、多くの交流関係者が集まり、関西センターがより情報を「ひらく」、そして、交流関係者同士が経験を「ひらく」場を設けることとし、企画には、以下の点を盛り込むことにした。

1) 関西センターから、研修の全体像及び研修における交流プログラムの位置づけを地域協力者に伝える

2) グループワークを中心とし、分科会参加者間の情報をシェアする場を設ける

分科会参加者が、自らの経験を語れるよう、グループワークを中心とする。企画側は、ファシリテーターとなるが、適宜、情報を「ひらく」役割を担う。単なるおしゃべりとならないよう、問題点に自ら気づき、解決策を皆で考える場とする。

3) 参加者が交流を企画する側に立ってみる経験を持つ

関西センターから指定された内容を指定された通りに行く、という受身になりがちな地域協力者に、交流プログラムを企画する体験をしてもらうことにより、関西センターが行って

いるコーディネートの意図を体感し、相互理解を深めるきっかけとする。

3. 分科会の実施

分科会は、シンポジウムのテーマに合わせ、「ひらく」「つなぐ」「つくる」という3つをキーワードとして進めた。当日は、地域の国際交流団体への参加者、日本語講師、大学・大学院生、自治体の国際交流担当者など34名が参加し、その大半は日頃関西センターの交流プログラムに参加している地域協力者であった。

3.1 日本語学習者訪日研修（大学生）の紹介〈ひらく〉

関西国際センターの種々の研修の中から、「日本語学習者訪日研修（大学生）」のプログラムを紹介した。この研修は、6週間という短期間の間に多くの交流プログラムが組み込まれ、また、日本語クラスで学習した内容から興味があるテーマを決定し、交流会でインタビューを行うなど、地域協力者との交流が直接的に研修プログラムに関わっている（詳しくは熊野 2008）。ここでは、当該研修担当の専門員より、様々な交流プログラムと教室で行われる日本語科目にどのような有機的関係があるのかを示し、交流が単なるイベントとして位置づけられているのではなく、いかに研修の重要な部分を担っているのかを伝えることをねらった。

当日は、これまで当該研修の交流プログラムに何年にも渡って参加してきた地域協力者でありながら、熱心にメモを取り、初めて研修の全体像を知ったという様子の人が少なくなく、改めてこれまで関西センターが研修の全体像や交流プログラムの位置づけを伝えてこなかったことを認識するとともに、その必要性を強く感じた。分科会参加者からも、「センターでの取り組みがよくわかった」「自分の知らなかったことを聞いてよかった」という声が聞かれた。

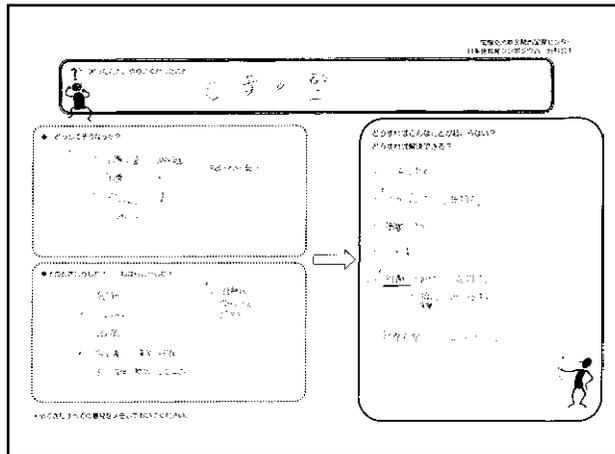
3.2 分科会参加者の経験のシェア〈ひらく・つなぐ〉

次に、分科会参加者の経験をシェアするための活動を行った。経験の中でも特に、国際交流活動⁽³⁾を行う中での困難点を共有し、共に解決の糸口を見つけることを目的とした。

先に述べた通り、地域協力者が自分の経験について話し合うような機会はこれまであまりなかったようである。実際、分科会参加者の何人かに尋ねたところ、所属団体のメンバーや家族とでさえ雑談程度に話す程度だということであり、所属団体を越えて経験を話し合うのは初めてだという分科会参加者がほとんどであったと思われる。初めて顔を合わせる参加者同士が、自分の経験を開示するのは容易なことではない。そこで、話しやすいように考えた手順を以下に示す。

- 1) 示されたテーマに沿って、自分の経験を振り返って思いついたことを紙に記入し、4、5名グループでその紙を見せながら、自分の経験を紹介する

図1 ワークシート例1



前半はアイスブレイクを目的とし、徐々に内容を深めていくようにした。

テーマ：「私の好きな国」「国際交流活動に参加しはじめたきっかけ」「国際交流活動に参加してよかったこと／得たこと」「国際交流活動で困ったこと」

- 2) 「国際交流活動で困ったこと」について、グループで問題をひとつ取り上げ、シートに書きながら(図1)原因や解決の糸口を探す
- 3) 話し合いの結果を全体で共有する

2) では、各グループで「ホームステイでの問題」、「コミュニケーション上の問題」、「個人的な外国人との付き合いの上での問題」について話し合われた。各グループの話し合い結果(一部)を表1に示したが、どのグループでも解決法について、個人で解決できること、日本語教

表1 国際交流活動で困った点とその原因や解決策についての意見

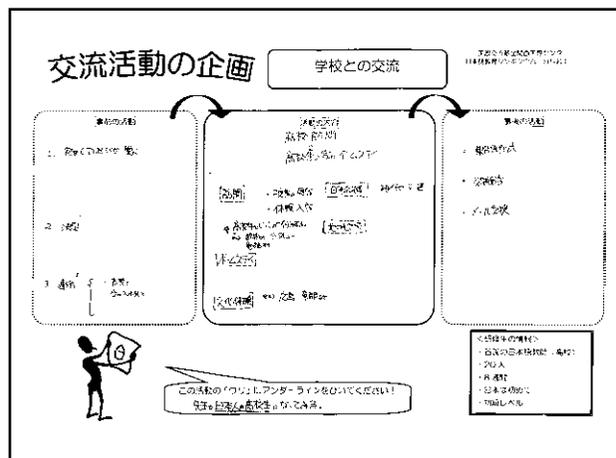
<p>[ホームステイでの問題]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前の認識不足、説明不足が原因ではないか。 ・そのとき、説明して解決したり、そのまま好きにさせたりした。 ・解決策：事前によく文化の違いを認識する。研修生と受入家庭双方への説明を徹底する。事後に受入家庭からの情報提供を受ける。 <p>[コミュニケーション上の問題]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉やバックグラウンドの違いが原因ではないか。 ・そのとき、ジェスチャー、実物、辞書を使って対処した。また、あきらめたこともある。 ・解決策：難しい言葉は言い換える。「分かりあいたい気持ち」が大切。無理やりどうこうしない。 <p>[個人的な外国人との付き合いの上での問題]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日頃相談にのっていて、彼らにとっての日本人は自分だけだったことが原因。 ・そのとき、できないことは断り、理由を聞いて人に相談するようになった。 ・解決策：できること、できないことをはっきり相手に伝える。
--

育機関との連携によって解決できるものの両方について話し合われていたことが印象的であった。また3)では、結果を発表すると同時に、「ホームステイで事前にもらう情報が少なすぎる」等、関西センターに対して具体的な要望も出された。

3.3 交流プログラムの企画〈つくる〉

前の活動では、「困ったことを解決する」という方向で話し合われたが、次に、「学習者との活動を円滑に進める」ことに視点を変え、8週間の各国の高校の日本語教師研修という架空の研修の交流プログラムを企画する活動を行った。この活動は、分科会参加者が、単発での交流プログラムについてだけを考えるのではなく、研修プログラム全体や学習者の事情にも意識を向けること、また、企画側に立つことで関西センターが行っているコーディネートの意図を体感してもらうことを狙いとした。3.1の研修プログラム全体の紹介は、ここでの活動のヒントとなる。

図2 ワークシート例2



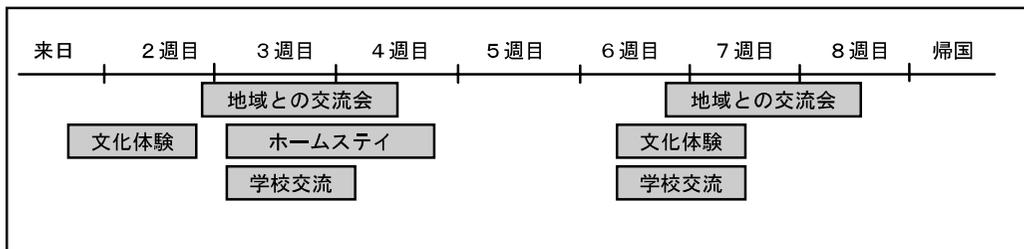
- 1) グループに分かれ、活動の種類（ホームステイ／文化体験／交流会／学校交流）の分担を決める
- 2) いつ、どのような活動を行うのか、その活動のための準備や活動後にすべきことはなにか、についてシートに書きながら（図2）グループで話し合う
- 3) 結果を全体で共有しながら、研修のどの時期に行うのがよいか調整し、一つの研修における交流計画をつくる

分科会参加者らは活発に話し合い、表2のようなアイデアや意見が出た。また、時期を調整し完成した最終的な交流計画は図3のようになった。

表2 架空の交流計画で出たアイデアや意見

<p>[文化体験]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化に関する施設の見学、運動競技の観戦、料理の紹介、京都や奈良の見学。 ・早い時期に沢山紹介する。興味があれば、後で個人で習ったり、ホームステイ時などに体験したりすることもできる。 ・学校交流と同時に、児童・生徒と一緒に体験する。 <p>[学校交流]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校を訪問する、高校生と交流する。実際に日本の高校の学生になってみる。教育実習を行う。 ・前半と後半に各1回で計2回行うのがよい。初回に気づいたことの答えを2回目に見つけることができる。小学生の日本語はわかりにくいので、小学生との交流は2回目に行うのがよい。 ・2回の交流は同じ学校でなくてもよい。 ・事後に、違いについて話し合う。報告書作成やメール交換などを行う。 <p>[地域の人との交流会]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2回は行いたい。 ・帰国前の交流会では、まとめとなるように発表会などを行う。教師らしい視点の発表を聞きたい。 <p>[ホームステイ]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生のいる家にホームステイする。 ・交流会の後に行えば、事前に研修生の様子も分かるし、ホームステイまでに家に招くこともできる。 ・できるだけ早い時期がよい。地域の情報を早い段階に知ることができるし、ホストファミリーと長く、親しく交流できる。 ・あまり時期が遅くならないほうがよい(3週目ぐらい)。 ・2泊または3泊にすれば、ゆっくりいろいろな活動ができる。 ・期間が8週間あるので、2回ぐらいあってもよい。

図3 分科会参加者による交流計画の全体案



分科会参加者は、この活動について「企画をする際の参考になった」「グループワークを通じて、交流のあり方で気づかされるが多かった」とコメントしている。研修プログラム全体や学習者の事情にも意識を向けるという新たな視点を提案することはできたのではないだろうか。

逆に、筆者ら企画側もこの活動を通して、「ホームステイを早い時期に設定するほうがいい」「交流会は2回は行いたい」「交流会の後にホームステイを行うといい」等、地域協力者らが、希望しているものに気づかされることになった。

4. おわりに

以上、地域協力者との連携の見直しを目的とするシンポジウム分科会の企画とそこでの学びについて報告した。これまで、日本語研修（教育）と地域との連携の重要性は強く叫ばれ、ボランティアによる地域の日本語教室などの活動については報告も多くなされている。しかし、様々な地域の交流協力者との連携やこのようなワークショップについての報告はほとんど見られない。今回の分科会を通して筆者らが得た知見は少なくなかった。

地域協力者が関西センターとの交流プログラムで得た経験は、他団体に所属する人とでも比較・共感しやすいものである。関西センターが今後もそれを行う場を何らかの形で設けることで、地域協力者間のネットワークの構築に寄与でき、また、関西センターと地域協力者との連携をよりよいものにできるのではないだろうか。今後、今回の分科会から得られた意見を、具体的に研修に反映していきたい。

〔注〕

- (1)文化体験や日本語会話を中心とする交流会やインタビュー、発表会、ホームステイ、学校訪問、日本語会話パートナーなど、外部の日本人との交流全体を指す。
- (2)必ずしも関西センターのある大阪泉南地域だけではなく、関西センターの交流プログラムに協力する人・団体すべてを指す。関西センター近隣5市3町で活動している国際交流団体10団体、大阪府、財団法人大阪府国際交流財団により構成される「関西国際センター研修生支援協議会」との連携により、交流プログラムは支えられている。
- (3)関西センターの交流プログラムに限らず、分科会参加者がこれまでに経験した様々な国際交流に関わる活動を指す。

〔引用文献〕

- 上田和子（2008）「日本語研修にかかわる人々が育んだ関西国際センターの10年」『をちこち』23号、56-59、国際交流基金
- 逢坂浩二（2003）「長期研修における交流プログラムについて」『日本語学』22-9、86-96、明治書院
- 熊野七絵（2008）「大学生短期訪日研修における体験交流活動型のコースデザイン」『広島大学留学生センター紀要』18号、31-46、広島大学留学生センター